

〈史料解説〉エリザ・シドモア 「不朽の島」

～米国女性紀行作家が観た明治中期の厳島～

中川 利 國（広島市公文書館長）

一 はじめに

この三月、米国の首都ワシントンでは、有名なポトマック河畔の桜まつりが植樹百周年を迎えたと報じられた。この日米友好の象徴である桜の植樹については、エリザ・R・シドモア (Eliza Ruhamah Scidmore) (図1) という一人の女性ジャーナリストが立役者となったことは良く知られている。⁽¹⁾ また、最初に彼女が提案してから、二四年におよぶ奮闘が実現の要であったことも、米国で紹介されている。⁽²⁾ そのシドモアが明治二〇年代に厳島を訪れ、彼女が書いた記事(図2)が当時の米国の人気雑誌へ紀行文として掲載されたことは、現在では殆ど知られていない。しかし、その記事が発行された当時は、地元『芸備日々新聞』においてもいち早く報道され、米国人が厳島を絶賛したことを少々興奮気味に伝えている。

明治二九年九月二九日 宮島の風景欧人の筆に上がる

八月発兌のセンチュリー雑誌を見るに、我宮島の風景を賞する一篇の長文を載せたり、記者は宮島を以って瀬戸内海に於ける神聖なる一島と称し、「不朽の島」と呼び、口を極めて其風景の佳絶なるを説きたる末、同島の人民に接するに性質醇朴にして、宛ら上古の民に逢ふの感あり、蓋し日本近時の文明に後ること百年なりと云ふも可ならん、外人の日本に遊ぶもの杖を宮島に曳くを忘るべからずと結べり、宮島天成の麗質は勢力あるセンチュリーの筆に依りて愈よ發揮せられ、将来欧人

の宮島に遊ぶもの益々多かるべし⁽³⁾

この記事の著者であるシドモアについては、まとまった評伝が存在しないため限られた資料に依ることになるが、少し紹介してみたい。シドモアは一八五六年、ウイスコンシン州マディソン (Madison, Wisconsin)⁽⁴⁾において、宣教師の一家に生まれた。一八七四年オバーリン・カレッジ (Oberlin College) 卒業後、ワシントンの上流階級についてニューヨークタイムズ紙等へ執筆したことから、本格的に執筆業についたようである。その後、アラスカ、ヨーロッパ、アジアを旅し、その地の紀行文や政治情勢等を、『ハーバーズ・ウィークリー (Harper's Weekly)』、『アウトLOOK (Outlook)』、『センチュリー (Century)』等の雑誌へ寄稿している。さらに、アラスカに関する著作⁽⁵⁾で紀行作家としての名声を得たことを手始めに、中国、ジャワ、インド等各地の旅行記を出版している。日本に関するものとしては、『シドモア日本紀行』⁽⁶⁾や『日露戦争下の日本―ハーク条約の命ずるままに ロシア軍人捕虜の妻の日記』⁽⁷⁾が知られているほか、雑誌、機関誌等への寄稿も数多くある。シドモアの文章の特徴としては、各地の文化・政治・歴史の記述に加えて、旅行者としての個人的体験が生き生きと描かれているとされる。⁽⁸⁾

シドモアは明治十七(一八八四)年二七歳の時に、駐日外交官として横浜に居住する兄を訪れたのが初来日で、⁽⁹⁾後に母が兄とともに日本で暮らしはじめたこともあり、以後、各国への取材旅行の合間に、何度も日本と米国ワシントンとを往復している。また、彼女は親日家としても知られており、前述

のワシントンへの桜の植樹以外にも、『日露戦争下の日本―ハーク条約の命ずるままに ロシア軍人捕虜の妻の日記』において日本の戦時捕虜に対する扱いを称賛し⁽¹⁰⁾、明治四一(一九〇八)年には勲六等宝冠章を授章



図1：シドモアの肖像
Courtesy DC Public Library,
Washingtoniana Division

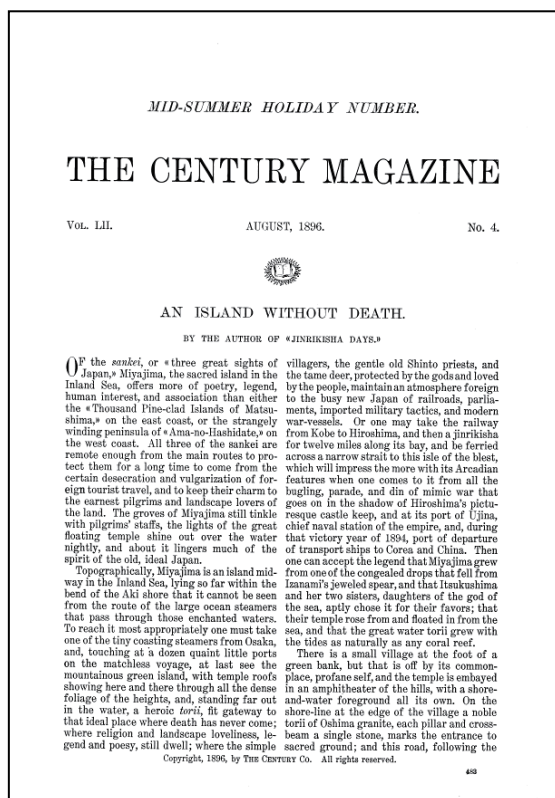


図2：『センチュリー』誌に掲載された「不朽の島」
Courtesy of Cornell University Library, Making of America Digital Collection

している。(11)

こうした知日家であるシドモアが厳島を訪れたのは、後述するとおり明治二七（一八九四）年夏と思われることから、その二年後に記事を書いた雑誌が発行されたことになる。この時期に外国人が厳島について記したものとでは、ちょうどシドモアの一年前、明治二六（一八九三）年の夏に日本への公式訪問の一環で厳島に立ち寄った、オーストリア皇太子フランツ・フェルディナントによる『オーストリア皇太子の日本日記』⁽¹²⁾が知られている。これと比べると、「不朽の島」は、無類の知日家としての豊富な知識を背景に、紀行作家としての確かな観察力と豊かな表現力を持つて綴られているため、当時の厳島をうかがうことのできる非常に貴重な資料であることが分かる。

さて、この記事が掲載された『センチュリー・マガジン』(The Century Magazine) 誌について触れてみたい。発行元のセンチュリー社(The Century Company) は明治十四（一八八二）年ニューヨーク市に設立され、設立当初からの定期刊行誌である『センチュリー・マガジン』誌は一八八〇年代および一八九〇年代における最高の一般雑誌として評価されている。特に、

南北戦争の歴史をあつかった「戦争シリーズ」(War Series) は、明治十七（一八八四）年から三年余り続けられ、南北両軍の将軍から一兵卒までの手記や二点以上の木版画で人気を博し、その発行部数は二五万部に倍増したといわれている。しかしながら、こうした商業的成功の後に二〇世紀に入ると、廉価な雑誌や新聞との競争にさらされ消え去っていった。⁽¹³⁾シドモアの厳島の記事が掲載されたのは、絶頂期から徐々に凋落しつつも、まだ名声を保っていた時代である。したがって、この記事は米国において非常に多くの読者の目に触れることになる。

二 シドモアが見た明治中期の厳島

(1) 白木の社殿と大鳥居

シドモアが訪れた時期の厳島は、現在とはその様相を大きく異にしている。明治四（一八七一）年以降に本格化した神仏分離により、仏教的とされた厳島神社社殿は丹色の塗装が剥がされ、大鳥居とともに長らく白木を露わにした姿で人々の目に晒されていた。神社社殿は、明治三五（一九〇二）年の修繕の際に⁽¹⁴⁾、大鳥居は明治四二（一九〇九）年の修繕の際に、ともに丹塗りの姿に戻されている。⁽¹⁵⁾このことは、記事本文においても、符合する部分がある。記事前半の厳島神社社殿や大鳥居について触れた箇所においては、建物等についての色彩の記述は全く見受けられないが、五重塔に触れた場面ではじめて丹色 (red) という色の表現が現れてくる。

古風な趣のある古い五重塔は、積み重ねられた丹色の屋根が、丘の木々を見事にかき分けている。⁽¹⁶⁾

また、大鳥居に触れた部分では、「巨大なクスノキの柱の間に小船で浮かんでみると、まるで石造建築物のように壮大で強固な印象である。」⁽¹⁷⁾とその壮大さを石造建築物に喩えているが、当時の大鳥居が丹塗りでなく白木であったことが、こうした印象を与えたことに関係したとも考えられる。

さらに、社殿等の色彩以外にも外観上の差異として、明治七（一八七四）年に、



図3 本殿（左側）の屋根に乗る千木・勝男木（部分拡大）
National Anthropological Archives, Smithsonian Institution, NAA
INV 04632200

神社にふさわしい棟飾りとして屋根に千木・勝男木（ちぎ・かつおぎ）が取り付けられたが⁽¹⁸⁾、これらは明治三〇年代に始められた各社殿の修繕の際に取り外されていったとされている。⁽¹⁹⁾後述するように当時シドモアが厳島滞在時に撮影した写真が残されているが、この中にも千木・勝男木が写されている。（図3）これらの棟飾りの大きさと比べて、厳島神社が複数の社殿や回廊で構成された大きな建物群であることから、それほど際立った印象はなかったのかもしれない。

厳島神社社殿や大鳥居が白木にされた原因となった神仏分離令であるが、これは厳島神社そのものの存亡の危機でもあったとされ、「政府から派遣された某大参事は、その社殿を仏式なると見て直ちに社殿を焼き払い、神体を海に流すべき事を命じた。これに対して、千年以上も代々棚守職を続けてきた野坂家の当主元延は、その命を聞いて驚き、直ちに家宝を売り旅費となし、身命を賭して単身江戸に上がり、朝廷に嘆願してやっと現状維持の許可を得た。」⁽²⁰⁾また、「別当職の大聖院は神社と分離し、二十坊は滅び、修理別当職の大願寺も独立し、諸所の仏像が多くここに集められ、大経堂は千畳閣と称しさらに豊国神社と改称して厳島神社の末社となった。（略）このほか、本地堂、十王堂、地藏堂、大鐘楼、輪藏や多くの院・坊は廃毀され、⁽²¹⁾と、神仏分離が比較的平穩に行われた⁽²²⁾とされる広島県においても、とりわけ神社仏閣が濃密に集積していた厳島においては、大きな影響があったと思われる。シドモアも、この神仏分

離にともなう廃仏毀釈についてわざわざ触れており⁽²³⁾、二〇年以上前の出来事ではあるが、当時の厳島においてなお忘れがたい大事件であったことをうかがわせるものである。

ここで、当時の厳島の描写としては少し奇妙な点に触れてみたい。シドモアの記事では、海岸沿いの参道の様子は次のように書かれている。

その村の端の海岸沿いには、各梁や柱が一枚石の大島石“Oshima granite”でできた堂々とした鳥居が建っており、聖地への入り口を表している。⁽²⁴⁾

厳島神社参道の入口にある、高さ十mあまりの石造の大鳥居は『宮島町史』⁽²⁵⁾によれば明治三八（一九〇五）年建立とされており、シドモアが訪れた明治二七（一八九四）年よりも、さらにはこの記事を掲載した雑誌が発行された明治二九（一八九六）年よりも後の建立となり、記事と矛盾することになる。しかし、この建立時期が推定された記述を詳しく検討してみると、明治二七（一八九四）年と明治二八（一八九五）年に、件の石大鳥居が描かれた絵図が発行されており⁽²⁶⁾、これらによればシドモアの記事との整合性は保たれる。ところが、当文献においては、明治三三（一九〇〇）年に買い求めたとされる写真に当該石大鳥居が写っていないこと、明治三八（一九〇五）年に「石鳥居上棟式」の件で出県した稟請記事があること⁽²⁷⁾、等をもつて建立年代が推定されている。しかし、土産物で販売されている写真や絵葉書の撮影ないし作成時期は、販売時期と必ずしも一致せず、むしろ内容的には古い撮影時期のもので、そのまま売られていることは珍しいことではなかった。現に、大正八（一九一九）年の写真帖に千木・勝男木を載せた本社本殿が写っていることは、明治三四（一九〇一）年にはじまった大修理の際に、遅くとも明治三二（一八九九）年にはこれらが外されたとする説明⁽²⁹⁾とも明らかに矛盾する景観である。異なる二つの絵図において、御笠浜という同じ場所に、偶然に存在しないはずの大鳥居が描かれたことは非常に奇妙であり、新たにこのシドモアの記事を考察に加えると、この時期に石大鳥居があった可能性は高いと考えられる。

(2) 絵馬等の奉納品

厳島神社に奉納された絵馬は、元々は廻廊や社殿に掲げられていたもので参詣者もこれらを楽しみながら参拝を行うことができた。それも、「本社に献



図4 「猿鹿に乗る図」 森祖仙作

ずるところ、新古の絵馬、両宮三棟拝殿より、東西廻廊に至まで、高下左右、すきまもなく掛連ね、其数幾百枚なるをしらず、⁽³⁰⁾ また、「著名な画家の絵馬も多く全体に質の高さは特筆される。」⁽³¹⁾ と質量ともに相当なものであるとされている。しかしながら、屋

根の下とはいえその環境は吹きさらしであり、劣化も激しく、嵐等で流失して失われることも度々あったようで、明治三四年の大修理以降は取り外され千畳閣（豊国神社）へ掛けかえられた。⁽³²⁾ 現在、その一部は厳島神社宝物館にも展示されている。

シドモアの記事は、これらの絵馬が廻廊等から外される前の時期であり、案内人の詳しくすぎる説明に閉口しながらも、その数点に言及している。

案内人たちは、一八七三（明治六）年のウィーン万国博覧会において、古美術の展示として貸し出された、四世紀前の著名人の肖像画をまず最初に示しながら、奉納絵馬の廻廊でも興奮気味に説明する。⁽³³⁾

これは、同博覧会へ出品された厳島神社の絵馬七点のうち六点が人物画と思われる中で、原文の表現（series of portraits of celebrities）に最も符合するものとしては、「扇面形三十六歌仙ノ図」（寛永二（一六二五）年）⁽³⁴⁾ ⁽³⁵⁾ がある。ちなみに、これが描かれた時期はおおまかに三世紀前（二七一年前）となり「四世紀前」とは一致しないが、厳島神社の奉納品から出品された最も古い作品でも天文二一（一五五二）年すなわち三四四年前であり、ぴたりと該当するものはない。その他の絵馬についても、同様に検討すると、

最も著名なものは（森）祖仙（Sosen）による、比類なくふわふわの毛の一匹の猿が、宮島の鹿の背に乗ったものだ。⁽³⁶⁾ については、幕末期の天保三（一八三二）年に六七面の絵馬が模写された『厳島絵馬鑑』⁽³⁷⁾ に載る森祖仙作「猿鹿に乗るの図」（図4）と符合する。また、少し変わったものとして二五〇年前に初めて長崎に来港したオランダ船の絵⁽³⁸⁾

については、同じく河野盛信作「阿蘭陀船入津之図」（図5）承応二（一六五三）年⁽³⁹⁾ ではないかと思われる。同時期に奉納された同じ絵師の作品「南蛮船図」承応二（一六五三）年⁽⁴⁰⁾ が、厳島神社宝物館に展示されている。また、絵馬ではないが、広島市が寄贈したと記述されている「巨大なブロンズの羅針盤」（図6）⁽⁴¹⁾ についても、符合するものが千畳閣に吊るされているが、明治二二（一八八九）年に市制施行した広島市が寄附したかどうかは、現地の記録には残されていない。羅針盤という珍しい奉納品から船との関係も示唆されるため、明治二三（一八九〇）年に落成式を行った宇品築港との関係も考えられる。

こうした絵馬のほかに、手水鉢や玉垣に加えて「薩摩の反乱で亡くなった

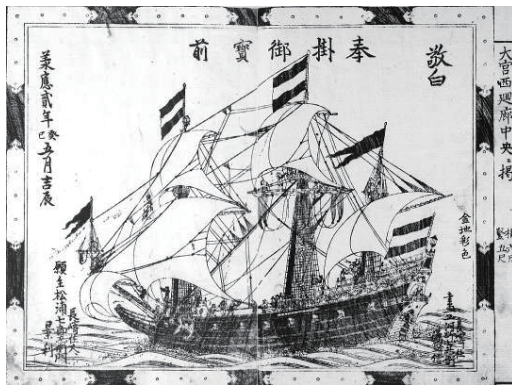


図5 「阿蘭陀船入津之図」 河野盛信作



図6 千畳閣（豊国神社）の羅針盤

兵士たちの記念碑」⁽⁴²⁾として『広島県壮兵殉難碑』に触れるなど、一か月以上の長期滞在という状況も加わってか、非常に細かな点にまで言及している。

(3) 挿絵とスミソニアンの写真コレクション

全体で十二頁からなる「不朽の島」には、全部で十二点の木版画と思われる挿絵が掲載されているが、うち八点には「写真を基にした」(“FROM A PHOTOGRAPH”)という注記が記されている。この写真の所在を調べたところ、記事が掲載された雑誌のコレクションが公開されているコーネル大学図書館 (Cornell University Library)⁽⁴³⁾ではなく、スミソニアン自然史国立博物館国立文化人類学資料館 (National Anthropological Archives, Smithsonian National Museum of Natural History) に、日本ばかりか中国等も含めた四〇〇点以上のシドモアの写真が保存されており、この中に厳島滞在中の写真も残されていることがわかった。撮影された内容から、四〇点については厳島で撮影されたものと推定しているが、三三点 (便宜的に「第一コレクション」と呼ぶ) についてはこの記事の内容と符合することから、この記事のために厳島を訪れた時に撮影されたものと考えられる。残り七点 (右記に同じく「第二コレクション」と呼ぶ) についてはスミソニアンにより、大正三 (一九一四) 年から五 (一九一六) 年と分類されている。コレクションの詳細は明らかではないが、第一コレクションで少なくとも厳島に関係している写真そのものは、約四 × 五インチ (一〇 × 一二・五センチ) の鶏卵紙のプリント (albumen print) で、台紙にマウントされているとのこと。第二コレクションはガラス乾板である。写真には、撮影場所や撮影日等の詳しい説明がないため、スミソニアンでもこれらの多くを特定するにはいたっていないのとことである。

さて、挿絵の基になった写真について少し詳しく解説してみたい。右に記事中の版面を切り取ったものの、左に基となった写真を並べてみると、「櫓を漕ぐ船頭」(図7)(挿絵の邦題は筆者による。以下同じ)、「小舟に集まった少年達」(図8)、「賽の河原」(図9)、「柴を運ぶ女」(図10)の四点については、全

く同じ構図 (ただし、人物等が一部省略されているものがある) の写真が残っている。「沖から見た厳島神社」(図11)と「鹿に餌をやる少女」(図12)、「玉取祭」(図13)については、類似した写真はあっても全く同じものはない。「鹿に餌をやる少女」については、複数枚の写真を合成した挿絵となっている。

特に「玉取祭」については、撮影位置が微妙に異なっている社殿のみの写真がコレクションに残されているが、玉取祭の様子を想像だけで違和感なく描くことは困難と思われるため、基となった写真は失われたと思われる。この挿絵については、櫓の場所が客神社祓殿 (まろうとじんじやはいでん) の正面に描かれており、現在執り行われている大鳥居側とは異なる。明治三三 (一九〇〇) 年奉納の里見雲嶺作の絵馬⁽⁴⁴⁾に、同じ位置で櫓を組んだ「玉取祭」が描かれていることから、当時はこの場所で執り行われていたのかもしれない。

また、「千畳閣と五重塔」(図14-1)についても該当する写真は残されていないが、本館が所蔵する明治三三 (一九〇〇) 年に厳島で購入された写真帖⁽⁴⁵⁾に、構図も木々の枝ぶりも挿絵と全く同じ写真 (図14-2) が収められている。この時代はまだ私製絵葉書の発行販売が許可されていないため、土産物としてこの写真帖のようにプリントを直接台紙に貼ったものが、販売されていたものと思われる。シドモアもこの写真と同じ場所で写真を撮ったか、または、こうした写真帖を購入したのかもしれない。

その他に、第一コレクションから主なものとして図15から23まで、同じく第二コレクションから図24から26までの計十二枚を掲載した。図22は写真では判然としないが原題は「濡れた祠の仏画へ水をかけるための柄杓」、図23は「神社で天照の神に祈る老人」となっており、何れも木版画の原画とはならなかったが、「不朽の島」に関係する写真だと思われる。

ところで明治時代の厳島には、陸軍の砲台等の軍事施設が数多くあり、当時の絵葉書にも「要塞司令部許可済」等検閲済みであることが印刷されている。正式には、「要塞近傍ニ於ケル水陸測量等ノ取締ニ関スル件」(明治三一年七月二七日公布)により撮影を含めた測量、模写等を無許可で行うことが禁止され、明治三二年には「要塞地帯法」(法律第五号 明治三二年七月一四日公布)という法令により厳格に定められた。こうした厳格な取締が行われた

時期の厳島における、外国人の写真撮影にまつわる事件等については、「厳島が、撮影禁止だったところ 室浜砲台、―鷹ノ巣低・高砲台をめぐって―」⁽⁴⁶⁾で詳しく説明されている。

「不朽の島」にも、砲台と思われる記述がある。

「中秋の名月」の夜、船頭は私たちを日没に海岸からかなり離れたところへ連れて行き、島の防御のために十か所ある要塞のうち二か所を見せた。砲門と砲郭は枝葉で覆われており、何食わぬ顔で宇品への入り口に臨む、狭くて潮の速い海峡を見下ろしていた。⁽⁴⁷⁾

当時は、日清戦争の最中であり、厳島にも臨時砲台が設置されていたが、本格的には明治三十年代から建造されることになる。⁽⁴⁸⁾ こうしたなかにおいて、シドモアによる厳島の写真が多数残されたのは、明治二七（一八九四）年当時には、まだ厳格な取締が行われていなかったためかもしれない。

（4）厳島来訪の時期

シドモアはこの記事を書く以前に、日本に関する著作として『シドモア日本紀行』の初版⁽⁴⁹⁾を明治二四（一八九一）年に発表している。これは明治三五（一九〇二）年に改訂され、この改訂版が現在の日本語版の原典となっている。この間、明治三二（一八九九）年と明治三三（一九〇〇）年の少なくとも二回にわたり初版の増刷が行われている。初版と改訂版の原典を比較してみると、厳島と広島周辺の記述が大きく改められていることがわかる。初版の「第三章 瀬戸内海と長崎」においては、次のように素っ気ないほど簡単な記述である。

神戸から長崎までの間で外国人に開かれている港は、政府の海軍基地がある広島だけであり、外国人パスポートを持つているために上陸しなくてはできない周囲の沿岸の中で、唯一の例外となっている。⁽⁵⁰⁾（筆者訳）

一方、初版から十一年後の改訂版では、多くの古い城下町に立ち寄りながら、瀬戸内海の西方の沿岸を鉄路は

進む。そのうち最も重要なところは広島である。その城には陸軍の司令部があり、一八九四年から一八九五年の戦争（日清戦争）の間、天皇が移られた場所でもある。帝国の最も重要な海軍港は呉であり、海軍士官学校のある江田島が、その数マイル離れたところにある。広島に面して、聖なる島である厳島がある。ここは、日本三景の一つであり、奈良よりも素敵でのどかである。また、他の日本三景である仙台湾の「千松島の松島」や、宮津湾の天国の階段という意味の奇妙な「天橋立」のどちらよりも、美しい風景と見事な建物があり、歴史や伝説にまつわる面白さを提供する。宮島においては、人が生まれたり、死んだりすることは許されていない。そして、ここは、神道の女神、市杵島姫と彼女の二人の姉妹を祀っているにも関わらず、正式には、女性はこの地に足を踏み入れることはできない。大社殿とその回廊は水中の柱の上に建てられ、水上の巨大な鳥居を潜って船で入って行くのである。何百もの献灯が海岸線に連なり、それらはしばしば灯される。聖なる鹿があちこちで歩き回っており、そこはとてもどこかで平穏なので、木々で覆われた岬や高台に砲台が隠されていることには気づかない。フランスやドイツのように、この要塞地帯でのスケッチや撮影は厳しく禁止されている。⁽⁵¹⁾（筆者訳）

とその記述は初版と比べて格段に詳しくなっている。これは明治二九年の「不朽の島」が基になったと考えるのが自然であろう。シドモアがこの記事を書くために厳島を訪れた時期については、シドモアの厳島訪問の旅程も含めて、正確なことは分かっていない。また、記事の内容についても、特に日清戦争の平壤陥落を祝った灯明のエピソードに関しては、正式な記録が残されていないことから、事実確認はできていない。

『シドモア日本紀行』の明治二四（一八九一）年の初版では既に、「瀬戸内海を六回も旅していると、季節や昼夜さまざまの、美しい海岸を見てきた。」⁽⁵²⁾と書かれている。明治三四年（一九〇一）年に山陽鉄道が下関まで開通する以前においては、山陽路は海路が重宝された時代であった。しかし、この時点で彼女が厳島を訪れているとすれば、初版の『シ

ドモア日本紀行』の記述ももう少し詳しいものになったと思われる。

したがって、シドモアがこの記事の取材で初めて厳島を訪れた時期は、記事の内容や写真からの推測の範囲にとどまるが、明治二七（一八九四）年夏と考えられる。また、スミソニアン⁽⁵²⁾のシドモアの二番目のコレクションが、大正三（一九一四）年から五（一九一六）年と年代が特定されていることから、この時期に再訪したものと思われる。

（5）シドモア、その後

シドモアは、現在『ナショナル・ジオグラフィック』（National Geographic）誌で本邦でも著名なナショナル・グラフィック協会（National Geographic Society）に、創設間もない一八九〇年に入会している。彼女の同誌への記事は高く評価され、後に編集方針が現在のような写真を重点としたものに変わったことが、写真を得意とする彼女の評価をさらに上げることになった。彼女は、男の世界と言われた同協会において、最終的には初の女性理事になるまでの名声を得たのである。⁽⁵³⁾ そんな彼女は、「不朽の島」が発表された明治二九（一八九六）年六月十五日に発生した三陸大津波の被災地を取材し、同誌の九月号に「最近発生した日本沿岸の津波」（The Recent Earthquake Wave on the Coast of Japan）⁽⁵⁴⁾と題して写真入りの記事を寄せている。この記事には、被災後にまじめな校長が自分の家族を探しに行く前に、御真影を安全な場所に避難させた、と当時の世相を反映したエピソードも紹介されている。「津波」（Tsunami）という日本語が英語圏に紹介された経緯について書かれた論文⁽⁵⁵⁾では、このシドモアの記事に加えて、ラフカディオ・ハーンが新聞社に寄稿した記事の二つを、英語圏での「津波」（Tsunami）の初出としている。しかしながら、ハーンの記事は自身の現地取材に拠るものではないようだ。シドモアは自ら現地で取材し、「津波」という言葉を用いたのである。

一九二八年十一月四日の『ニューヨーク・タイムズ』紙⁽⁵⁶⁾に、前日にスイスのジュネーブで行われたシドモアの葬儀の様子が伝えられている。家族のいないシドモアがアメリカ領事に宛てた遺書では、葬儀も行わず火葬し、遺灰

は礼儀にかなった方法で分配して欲しいという慎ましいものだった。日本政府の要望により、遺灰の一部は横浜に埋葬され、日本で亡くなった母や兄とともに眠っている。

三 おわりに

古くは、広島市の西部地域（現佐伯区）が厳島の荘園領地であった中世に遡るが、浅野氏以降は城下の遊郭・芝居小屋等は禁止され、厳島にのみ許されるなど、広島と厳島の関係は緊密なものとなっていた。管弦祭においても、城下の各町が競って御供船を出し、管弦船を曳く漕船の一艘を江波から出すなど、城下こぞつての祝祭であった。広島市域は厳島と信仰はもとより祭祀や遊行においても、深く結びついてきた歴史を持つのである。

ところが、こうした広島市と厳島との密接な関係も近代の到来とともに大きく変容することになる。なかでも特筆すべきは山陽鉄道が徳山まで延伸され、対岸に「宮島駅」が設置された明治三〇年九月以降のことである。鉄道延伸に呼応して、対岸の大野町との間に渡船が開始されたことから、⁽⁵⁷⁾ 厳島参詣の人の流れが大きく変わることとなった。

「宮島に参詣せんとするものは先づ広島に集り、而して本川元安川又は京橋より渡船し、宮島へ参詣したる後にもまた必ず広島に立ち戻りたる上、其れ其れ土産物を買ひ整え帰郷するを常とせり」という状態であったのが、「汽車の開通に伴い（略）自然客足を広島市に留むること少なきに至り」⁽⁵⁸⁾

シドモアが描いた厳島は、鉄道の延伸によりまさに「広島」と「厳島」との関係が変貌する前の姿を捉えたものである。近代化に勤しむ日本にあって、さらに戦時の国内の先端となった「広島」の姿は、とりわけ古よりの日本の姿を残す「厳島」を際立たせることになったのである。

本稿をまとめるにあたり、スミソニアン自然史国立博物館国立文化人類学資料館、コーネル大学図書館および広島市立中央図書館に対して、多大な協力をいただいたことに感謝を表するものである。



図 7-2 Boatman in Costume, Rowing Boat Near Torii (Gateway) in Sea, NAA INV 04631200



図 7-1 MIYAJIMA BOATMAN.



図 8-2 Boys Swimming and Diving from Boat, NAA INV 04634400



図 8-1 MIYAJIMA DIVERS.



図 9-2 Shrine of Jizo (Buddhist Helper of Those in Trouble) Surrounded by Stones, NAA INV 04634000



図 9-1 SHRINE OF JIZO SAN, PROTECTOR OF LITTLE CHILDREN.



図 10-2 Three Women, Firewood Porters, in Costume, Carrying Loads Of Wood Atop Heads, NAA INV 04633600



図 10-1 MIYAJIMA PORTERS

Above left side: National Anthropological Archives, Smithsonian Institution

Above right side: From the article "AN ISLAND WITHOUT DEATH", Courtesy of Cornell University Library, Making of America Digital Collection



図 11-2 Torii (Gateway) in Sea,
National Anthropological Archives, Smithsonian
Institution, NAA INV 04632000



図 11-1 VILLAGE OF MIYAJIMA, WITH TORII, TEMPLE, AND
SHORE LANTERNS. From the article "AN ISLAND
WITHOUT DEATH", Courtesy of Cornell University Library,
Making of America Digital Collection



図 12-2 Woman in Costume, Feeding Deer at Shinto
Temple, National Anthropological Archives,
Smithsonian Institution, NAA INV 04633300



図 12-1 MIYAJIMA TEMPLE COURT AT LOW TIDE. From the
article "AN ISLAND WITHOUT DEATH", Courtesy of Cornell
University Library, Making of America Digital Collection



図 13-2 View of Shinto Temple, Torii (Gateway) in Sea
Beyond, National Anthropological Archives,
Smithsonian Institution, NAA INV 04632600

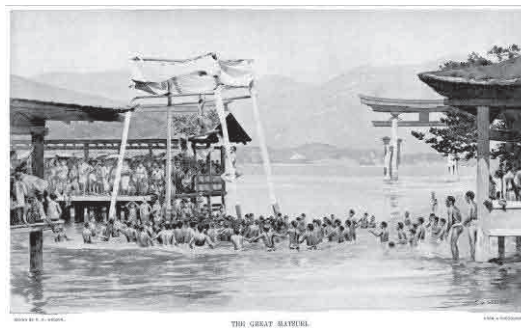


図 13-1 THE GREAT MATSURI. From the article "AN ISLAND
WITHOUT DEATH", Courtesy of Cornell University Library,
Making of America Digital Collection



図 14-2 「厳島千畳敷」、明治33年厳島写真帖、広島市
公文書館蔵

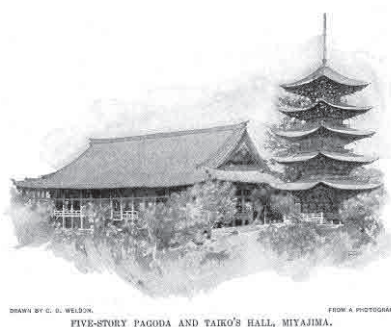


図 14-1 FIVE-STORY PAGODA AND TAIKO'S HALL, MIYAJIMA.
From the article "AN ISLAND WITHOUT DEATH", Courtesy of
Cornell University Library, Making of America Digital Collection

 図 17 Shinto Temple and Five-Story Pagoda, NAA INV 04632300	 図 16 View of Shinto Temple from Sea, Boats Nearby, NAA INV 04632200	 図 15 Torii (Gateway) in Sea, Shinto Temple in Background, NAA INV 04631900
 図 20 Man, Town Crier, in Costume Outside Building Near Gate, NAA INV 04633500	 図 19 Two-Story Pagoda, NAA INV 04633800	 図 18 Man in Costume, Feeding Deer at Shinto Temple, NAA INV 04632800
 図 23 Old Man in Costume, Praying to Sun (Goddess Amaterasu?), NAA INV 04634300	 図 22 Dipper for Pouring Water on Image of Buddha at Wet Shrine, NAA INV 04633900	 図 21 Woman, Firewood Porter, in Costume, Carrying Load of Wood Atop Head, NAA INV 04633700
 図 26 PI139_X28	 図 25 PI139_X30	 図 24 PI139_X13
National Anthropological Archives, Smithsonian Institution		

註

- (1) Scidmore, Eliza R. *Jintiskia Days in Japan*. 2nd ed. New York and London: Harper & Brothers, 1902. エリザ・R・シドモア、外崎克久訳『シドモア日本紀行』、訳者序文、講談社、二〇〇二年
- (2) *Cherry Blossom Festival*. National Park Service. U.S. Department of the Interior. Web. 30 May 2012.
- (3) 勝部真人、佐藤靖裕、『芸備日々新聞』における厳島関連記事(2)、『広島大学大学院研究科附属内海文化研究施設』、『内海文化研究紀要』第三五号、十九頁、平成十九年三月
- (4) 出生地は「アイオワ州クリントン (Clinton, Iowa)」とする説も複数ある。前掲、『シドモア日本紀行』四六八頁
- (5) Scidmore, Eliza R. *Alaska: Its Southern Coast and the Sitkan Archipelago*. Boston: Lothrop, 1885
- (6) 前掲『シドモア日本紀行』
- (7) Scidmore, Eliza R. *As the Hague Orphans -- Journal of A Russian Prisoner's Wife in Japan*. New York: Henry Holt, 1907. 『日露戦争下の日本―ハーグ条約の命ずるままに ロシア軍捕虜の妻の日記』、エリザ・R・シドモア著、小木曾龍、小木曾美代子訳、新人物往来社、二〇〇五年八月
- (8) ハリウッド・シドモアの略歴については、以下に示す。“SCIDMORE, Eliza Ruhannah” *American National Biography*, vol.19. New York: Oxford University Press, 1999.
- (9) 前掲『シドモア日本紀行』、四六八頁。このシドモアの年譜は、執筆作品を含めて非常に詳細までまとめられているが、雑誌記事については全てが網羅されているわけではないようだ。
- (10) (8)に同じ
- (11) 前掲『シドモア日本紀行』、四七二頁
- (12) フランツ・フェルディナント、安藤勉訳『オーストリア皇太子の日本日記―明治二十六年夏の記録―』、六六―八三頁、講談社、二〇〇五年
- (13) センチュリー誌の概要は以下に示す。Century Company Records 1871-1924. Manuscripts and Archives Division. Humanities and Social Sciences Library. The New York Public Library. Jan. 2004 Web. 30 March 2012.
- (14) 古田千鶴子、大西純子編『六角紫水の古社寺調査日記』三二五頁、東京藝術大学出版会、平成二二年
- (15) 『宮島町史 特論編・建築』二九五頁、宮島町、平成九年

- (16) 中川利國、「不朽の島」、『広島市公文書館紀要』第二五号、三五頁、広島市公文書館、平成二四年
- (17) 前掲「不朽の島」、三三頁
- (18) 前掲『宮島町史 特論編・建築』一〇六頁
- (19) 前掲『宮島町史 特論編・建築』一二二頁
- (20) 『広島県神社誌』、一五二〇頁、広島県神社庁、平成六年
- (21) 『広島県史 近代1 通史V』、四九九―五〇〇頁、広島県、昭和五五年
- (22) 前掲、四九九頁
- (23) (17)に同じ
- (24) (17)に同じ
- (25) 『宮島町史 資料編・石造物』八六頁、宮島町、平成五年
- (26) 前掲『宮島町史 資料編・石造物』、八五頁
- (27) (25)に同じ
- (28) 前掲『宮島町史 特論編・建築』一〇八頁
- (29) (19)に同じ
- (30) 『芸藩通志』復刻版 第一巻、一八七頁、国書刊行会、昭和五六年一月
- (31) 原田佳子、『厳島平成絵馬鑑』、九三頁、厳島平成絵馬鑑刊行会、平成一五年
- (32) 前掲『宮島町史 特論編・建築』一〇八―一〇九、四二四頁
- (33) 前掲「不朽の島」、三四頁
- (34) 東京国立文化財研究所、『明治期万国博覧会美術品出品目録』、一八八頁、中央公論美術出版、平成九年
- (35) 前掲『厳島平成絵馬鑑』、二二頁
- (36) (33)に同じ
- (37) 『厳島絵馬鑑』巻之三、天保三年、千歳園藤彦、広島市立中央図書館蔵
- (38) (33)に同じ
- (39) 『厳島絵馬鑑』巻之四、天保三年、千歳園藤彦、広島市立中央図書館蔵
- (40) 前掲『厳島平成絵馬鑑』、九頁
- (41) (33)に同じ
- (42) (16)に同じ

- (43) 現在では、コーネル大学においても雑誌のオリジナルは保存されておらず、デジタル・スキヤニングした当時のデータのみが残っている。
- (44) 前掲『厳島平成絵馬鑑』、六四頁
- (45) 『厳島写真帖』（仮題）製作者・販売者不明、広島市公文書館蔵
- (46) 「厳島が『撮影禁止』だったころ——室浜砲台、鷹ノ巣低・高砲台をめぐる」、瀬崎圭二、『厳島研究』、第八号、世界遺産・厳島—内海の歴史と文化プロジェクト研究センター、二〇一二年三月
- (47) 前掲「不朽の島」、三七頁
- (48) 前掲「厳島が『撮影禁止』だったころ——室浜砲台、鷹ノ巣低・高砲台をめぐる」、三頁
- (49) Scidmore, Eliza R., *Jinrikisha Days in Japan*, 1st ed., New York, Harper & Brothers, 1891
- (50) 前掲『*Jinrikisha Days in Japan*, 1st ed., 1891, p359
- (51) 前掲『*Jinrikisha Days in Japan*, 2nd ed., pp359-360
- (52) 前掲『*Jinrikisha Days in Japan*, 1st ed., 1891, p358
- (53) (8) (同上)
- (54) 1896 Japan Tsunami - Pictures, More from National Geographic Magazine. *The Recent Earthquake Wrote on the Coast of Japan*. n.d. Web. 1 Apr. 2012.
- (55) Cartwright, Julian H.E. and Hisami Nakamura. *Tsunami: a history of the term and of scientific understanding of the phenomenon in Japanese and Western culture*. NOTES & RECORDS of THE ROYAL SOCIETY. 2008 62. pp151-166. 12 Mar. 2008 Web. 1 Apr. 2012.
- (56) "MISS ELIZA SCIDMORE DIES IN 72 - Author of "Jinrikisha Days in Japan" and Other Books of the Far East" *The New York Times*. 4 Nov. 1928. Web. 1 Apr. 2012
- (57) 『広島県大野町誌』、五四四頁、大野町、平成四年
- (58) 前掲『芸備日々新聞』における厳島関連記事 (2)、九頁